

REPORT

令和6年度 おかやま文化芸術アソシエイツ事業報告書



公益社団法人 岡山県文化連盟

おかやま
文化芸術アソシエイツ

おかやま文化芸術アソシエイツ

岡山県文化連盟が持つ既存のネットワークを生かして、私たち自身が生活するその地域の文化を構成する人や資源、歴史についてよく知り、地域の未来を見据えた新しい価値の創造と多様な主体の共生に寄与するための取り組みを続けています。

おかやま文化芸術アソシエイツの機能

1 中間支援機能

文化団体等の活動に対する相談対応、助言、伴走支援、パイロット事業、文化活動に係る研究会、勉強会、講演会などの実施

2 シンクタンク機能(調査分析) ・ 政策提言

県内の文化芸術資源を発掘、再評価、活用するための調査事業の実施

3 助成金の分配

県民文化祭を通じた助成、県や助成財団の助成金審査など

実施体制

主催 おかやま文化芸術アソシエイツ(公益社団法人岡山県文化連盟)・岡山県

プログラム・コーディネーター(非常勤) 金孝妍

アドバイザー(非常勤) 朝倉由希、斎藤 努、杉浦幹男、森山知己

エグゼクティブ・アドバイザー(非常勤) 大月ヒロ子

WEB・システム担当 株式会社 LogooDesign

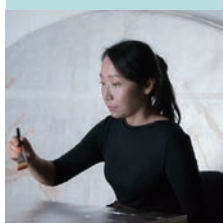
プログラム・オフィサー(常勤、文化連盟主任 兼務) 高田佳奈

記録・アーカイブ担当 合同会社生活と表現

文化連盟事務局 兼務(常勤) 中西 健

映像・編集担当 ざっばうさぎ

文化連盟事務局 兼務(常勤) 劔持宏子、神田 真巳子



金孝妍(キム・ヒョヨン)

アーティスト

1980 韓国済州島生まれ/2001 École Nationale Supérieure des Beaux-Arts de Paris, France 交換留学
2003 弘益大学校美術大学 絵画科 卒業(韓国・ソウル) / 2005 弘益大学校一般大学院 絵画科修士 修了(韓国・ソウル)
2018 倉敷芸術科学大学大学院 芸術研究科 芸術制作表現専攻博士課程 修了 / 岡山市在住
<主な賞歴>2016 第2回 石本正日本画大賞展 奨励賞受賞 / 2017 岡山県新進美術家育成I氏賞 奨励賞

事業内容

助成事業

おかやま県民文化祭共催 文化パワーアップアクション助成事業

文化・芸術を生かした地域的・社会的課題への対応を通じ、新たな価値の創造を目指す事業に助成しています。(次世代育成支援事業、地域文化創造支援事業)

マイニングおかやま 活用実践モデル事業助成

おかやま文化芸術活動相談窓口寄せられた相談の中から、公益性が高く文化芸術の社会的価値を具現化するに相応しい事業をモデル事業として採択し助成しています。

制作事業

文化芸術交流実験室

文化・芸術と他分野との連携による新たな取り組みの提案と、ソーシャルインクルージョンの視点に基づくレクチャーとワークショップを定期的に開催。県内の人材や文化資源の領域横断を誘発する出会いの場の創出とネットワーク構築を目指しています。

訪問実験室! 文化芸術が生まれてくる現場

公式 YouTube チャンネル「OKAYAMA CULTURE V」で公開。文化芸術が日々生み出される場所と、そこで創作や生活をしている表現者に会いに出かけ、日頃私たちが足を踏み入れることのないプライベートな現場をレポートしています。

おかやま県民文化祭 これがOKAYAMA! プログラム

おかやま県民文化祭の象徴的事業として、毎年地域（備前、備中、美作）とテーマを変えながら実施。地域の文化芸術資源を活用し展開する事業や、新たな価値を発見し楽しみ方を提案する事業を企画運営しています。

調査研究事業

ヒト・コト・場所

県内の文化芸術資源を発掘、再評価、活用するための調査研究。県内のちょっと気になるヒト・コト・場所取材して、WEB や冊子で紹介しています。

公式 YouTube 「OKAYAMA CULTURE V」

おかやまの文化芸術の“楽しい”を紹介する映像コンテンツのプラットフォーム。アソシエイツで作成する様々な映像コンテンツのほか、県内で活躍する多様な主体の文化芸術活動の様子を随時公開しています。

マイニングおかやま

岡山県を拠点に活動するアーティストを地域の貴重な文化資源として可視化し、アーティスト活動の活性化に繋げていただくための WEB プラットフォームを運営しています。

その他の事業

アートマネジメント研修

地域の文化芸術を支える側の人材育成を目的として実施。文化関係公益法人や文化施設等の職員を対象とした情報交換会（右記参照）に付随した取り組みです。

おかやま文化芸術活動相談窓口

文化芸術活動を行う個人、団体を対象とした専門の相談窓口。電話、FAX、メール、問合せフォームで受付しています。

他機関との連携

<行政機関等>

みんなの活動官民合同資金調達説明会 & 相談会

行政、福祉、共同募金、NPO センター、コミュニティ財団など、官民合同、分野横断で年間3回程度実施しています。

岡山県障害者文化芸術活動支援センターの専門家ネットワーク

岡山県障害福祉課が設置する障害者文化芸術活動支援センターの協力専門機関としてネットワークに参加。障害者アートポータルサイトに障害のある人の文化芸術活動に関する相談先として掲載されています。

<公益財団等>

県内文化関係公益法人等情報交換会

地域の文化力の向上を目的として、文化関係公益法人や文化施設等の職員による情報交換会を年2回程度実施しています。

情報発信

- <https://o-bunren.jp/associates/>
- Facebook
<https://www.facebook.com/o.bun.ren/>
- YouTube
OKAYAMA CULTURE V
- X (旧 Twitter)
@o_bunren
- Instagram
@okayamabunka

発行物

- おかやま文化芸術アソシエイツ事業報告書
- おかやま県民文化祭 これがOKAYAMA! プログラム冊子等

文化芸術交流実験室

岡山県内の優れた文化・芸術資源を掘り起こし、その価値を県民の皆様に再認識していただけるよう、調査研究事業を行いました。調査の過程で得られる新たな情報や人材データをもとにして、文化・芸術と他分野との連携による新たな取り組みの提案と、ソーシャルインクルージョンの視点に基づいたレクチャーとワークショップを定期的に開催し、県内の人材や文化資源の領域横断を誘発する出会いの場の創出とネットワーク構築を目指しています。

この実験室に期待するのは、文化芸術コミュニティ内での交流はもちろん、福祉や教育、まちづくりなど様々な分野との交流に文化芸術の創造性を生かした新しい取り組みが始まり、すべての人が文化芸術を楽しむことができる岡山が生まれることです。

※第1～5回は平成29年度、第6～17回は平成30年度、第18～26回は令和元年度、第27～31回は令和2年度、第32～36回は令和3年度、第37～41回は令和4年度、第42～46回は令和5年度に実施

第47回 建築探偵団 其の七「門前町・金光」

日時 | 2024年10月26日(土) 13:00～16:00

開催地 | 浅口市金光町大谷周辺

講師 | 石田尚昭(建築・地域文化資源活性化研究会 代表)

西規雄(大谷地区元気いっばいまちづくり協議会)

参加者数 | 12名

第48回 『民藝』ってなんだろう? 岡山ものづくり

日時 | 2024年11月16日(土) 11:00～16:00

開催地 | 倉敷民藝館(倉敷市中央1-4-11)

講師 | 須浪隆貴(須浪亨商店5代目、岡山県民藝協会副会長)

軸原ヨウスケ(デザイナー、COCHAE代表取締役)

柳沢秀行(倉敷民藝館館長補佐、公益財団法人大原芸術財団シニア・アドバイザー)

参加者数 | 29名

第49回 子どもの問いが導く世界:フラーと共に考える未来のヒント

日時 | 2024年12月14日(土) 11:00～16:00

開催地 | 奉還町ユースセンター(岡山市北区奉還町 3-1-32)

講師 | 芹沢高志(アートディレクター、翻訳家)

参加者数 | 16名

第50回 訪問実験室!文化芸術が生まれてくる現場vol.8「The民藝～伝統を受け継ぐ草のいかごづくり～」

配信開始 | 2025年4月

開催地 | YouTube (OKAYAMA CULTURE V)

講師 | 須浪隆貴(須浪亨商店5代目、岡山県民藝協会副会長)

アートマネジメントオンライン研修

文化・芸術と他分野との連携による新たな取り組みを実際に進めるためには、各分野に関わるマネジメントの基礎的な知識を身に付けることはもちろん、それらを生かした実践例を知ることによってその生かし方を学んだり、ワークショップや実践等による身体化が欠かせません。例年、「文化芸術交流実験室」でもアートマネジメントに関わるテーマを取り上げる回を設けるほか、文化活動に係る研究会・勉強会・講演会等を実施してきました。

オンライン研修は、一部を除いて公式 YouTube「OKAYAMA CULTURE V」で、アーカイブ公開しています。

人口減少時代の地域文化芸術振興に向けて～信州アーツカウンシルの3年間

日時 | 2025年2月26日 (水) 15:30～17:00

開催地 | 岡山県天神山文化プラザ&YouTube配信

講師 | 野村政之 (信州アーツカウンシル ゼネラルコーディネーター)

参加者数 | 対面23名、オンライン30名

文化芸術交流実験室47 建築探偵団 其の七 「門前町・金光」

日時：2024年10月26日(土) 13:00～16:00

開催地：浅口市金光町大谷周辺

講師：石田尚昭(建築・地域文化資源活性化研究会 代表)

西規雄(大谷地区元気いっばいまちづくり協議会)

今回の建築探偵団は、岡山県浅口市金光町大谷地区と一緒に歩きながら建物を味わいました。金光町はその名の由来である金光教本部の門前町として発展し、老舗の店舗や歴史的な建物が多く残されています。お話を伺ったのは、創業120年の和紙店「西紙店」の西規雄さん。建築探偵団常任講師の石田さんと共に、金光町の歴史を知った上で感じられるまちや建物の魅力について、普段とは違った角度でアプローチする時間を楽しみました。

石田尚昭…建築・地域文化資源活性化研究会 代表。東京理科大学大学院工学研究科建築学専攻修了。岡山市職員として足守地区のまち並み保存、西川緑道公園の活性化、旭川かわまちづくり事業などを手掛ける。2024年2月まで山陽新聞「さん太タイムズ」「面白たてもの歩記(あるき)」を執筆。一級建築士・ヘリテージマネージャー。

西規雄…大谷地区元気いっばいまちづくり協議会。1973年金光町大谷生まれ。家業の印刷会社を継ぐために上京して日本プリンティングアカデミー入学、同業に就職。2000年に帰郷して昭和印刷(株)入社、2008年代表取締役就任。2010年大谷地区元気いっばいまちづくり協議会会長就任、2020年(一社)大谷の会設立などまちづくりに携わる。



レポート

秋の爽やかな気候に恵まれた7回目の建築探偵団。今回は十数名の参加者が金光教本部の研修施設「光風館」に集まりました。まずは講師の石田さんと西さんから、金光町の歴史や特徴について説明を受けました。

その後は金光教本部に向けて移動を開始。道中では立派な外塀や石垣、金光教の「金」の御紋が象られた屋根瓦、商店街のトラス式アーケードなどに注目。少し歩くだけでも、金光教の門前町ならではの個性的なまち並みを感じられます。石田さんの詳しい解説が始まると、参加者も独特の意匠に目を向けながら風景や建物を写真に収めていました。

一同は境内に入り、神殿となる本部広前会堂を参拝。この日は昭和34年に建てられた広前祭場の内部も見学できました。祭場は1万人が着席できる庄巻のスケールで、信仰の場特有の神聖な空気に包まれています。そのほか立教聖場や修徳殿なども巡り、明治・大正・昭和の時代ごとに創られた宗教建築を鑑賞しました。

次は境内を出て山側を歩き、歴代教主を祀る奥城や金光教学院などの関連施設を巡りました。教学研究の洋館は、江川三郎八の設計により昭和5年に建てられた貴重な近代建築です。一同は塔屋や玄関ポーチなどに着目し、金光教の多彩な建築群にますます興味を膨らませていました。

後半は門前町の中心部へと移動。ノスタルジックなまち並みは映画「とんび」のロケ地になり、古き良き建物が多く残っています。中でも特徴的なのは、かつて参拝客の宿泊場所として使われた木造3階建ての建物。他にも懐かしさ漂う店先や看板、独特の屋根を持つ八つ棟の木造神殿、洋風の金光教徒社といった金光教関連施設など見どころがたくさん。西さんからは映画撮影時のエピソードも飛び出し、さまざまな要素を楽しめる時間となりました。

石田さんは、まち歩きを深めるテーマとして金光饅頭の文化を取り上げました。そこで散策中には金光饅頭を販売する2軒の店に立ち寄り、名物の甘味でブレイクタイム。最後は光風館に戻り、金光饅頭を食べ比べながらまち歩きや建築探訪の感想を述べあいました。



講師の西さん(左)と石田さん(右)



金光教の教学研究洋館を外から見学



門前町を散策しながら建物を鑑賞

キーワード



金光教本部

金光教は戦前の神道十三派の一つであり、江戸末期に赤沢文治、後の金光大神（こんこうだいじん）によって開かれた創唱宗教。天地金乃神（てんちかねのかみ）の主神とし、神と人との間を仲介する「取次」が信仰活動の中心となっている。金光教本部は浅口市金光町にあり、町名の由来となっている。本部境内とその周辺には、神様を祀る広前会堂（左写真）や祭場、休憩所、奥城、図書館、学院、研究所などさまざまな関連施設がある。
<https://www.konkokyo.jp/>



金光町大谷のまち

浅口市金光町は、金光教発祥の地として明治期から発展。中でも大谷地区は門前町として知られ、大正・昭和から続く古き良きまち並みが今も残っている。町内には木造の商店や金光教関連の施設、国登録有形文化財を含む歴史的な建築物も多く点在し、2022年公開の映画「とんび」のロケ地となった。講師の西さんが所属する「大谷地区元気いっぱいまちづくり協議会」などの地元グループも発足され、地域で協力し合いながらまちを盛り上げている。



金光饅頭

浅口市金光町の名物菓子で、金光教の参拝者や観光客の土産品として親しまれている。カステラ風の生地で餡を包んで焼き上げており、金光教の御紋である八つ波と金の文字が焼型や焼き印でかたどられているのが特徴。現在は門前町の「備中堂」「金悦堂」「小川屋」の3軒で売られており、店によって製法や味のバリエーション、御紋のデザインに違いがある。それぞれに商品名が付けられているため、金光饅頭は総称として呼ばれている。

ワークショップ

おやつ

この日は「金光饅頭」についても話題が上がったことから、営業していた菓子店「金悦堂」「小川屋」の2軒を散策の合間に訪問。参加者分を購入し、休憩タイムや散策後のおやつとして楽しんだ。中には2軒の食べ比べも楽しむ人も。



プログラム

- 13:00 金光北ウイング「光風館」に集合
 - ・金光教や金光町の歴史、建築物の見どころを解説
- 13:35～ まち歩きに出発
- 13:45～ 金光教本部を見学
 - ・修徳殿講堂→立教聖場→本部広前会堂→本部広前祭場
- 14:30～ 金光教学院へ徒歩移動
 - ・金光教学院→教学研究所
- 15:15～ 門前町を散策
 - ・商店街の店舗、金光教関連施設の建物を鑑賞（金光教徒社、八つ棟造りの神殿、難波教会など）
- 15:30～ 金悦堂（金光饅頭）に立ち寄り
- 16:00～ 「光風館」到着
 - ・金光饅頭を食べながら散策の振り返り

終了・解散



参加者コメント

- ・まち歩きをしながら景観や建築を眺めるのはもちろん、金光教の土地ならではの歴史や歩みを知るきっかけになり、想像よりもスケールの大きな体験になった。(30代/女性)
- ・建築を通して、新たな視点でまちづくりを考えることができた。(60代/男性)
- ・宗教の成り立ちやまちの結びつきなどについて、地元の方から知る機会は少ないので面白かった。(40代/男性)

講師コメント

まちをしっかり歩いてみると、普段はなかなか気づかない建物や風景の魅力に出合えます。それを知ってもらうことが建築探偵団のテーマなのですが、今回の金光町ではより個性的なまち並みや宗教関連の特徴的な建築物をたっぷり鑑賞できました。ひとつの新宗教が根ざしている独特なエリアですが、信徒以外にも受け入れる懐の広さがあり、穏やかな空気を感じます。一つのまちの中にいろいろな要素があるのは非常に面白いですね。(石田)

普段は金光町大谷の案内役としてまちの風景や歴史を案内していますが、今回は建築というテーマだったので、私自身も知らない情報に多く触れられる一日になりました。石田さんの解説も興味深く、普段はなかなか無い貴重な機会だったと思います。特に良かったのは、参加者の皆さんと参拝できたこと、祭場の施設内部まで見学できたこと。いつもは山の方まで上がることも無いので、充実したまち歩きができました。(西)

『民藝』ってなんだろう？
岡山ものづくり

日時：2024年11月16日（土）11:00～16:00

開催地：倉敷民藝館（倉敷市中央1-4-11）

講師：須浪隆貴（須浪亭商店5代目、岡山県民藝協会副会長）

軸原ヨウスケ（デザイナー、COCHAE代表取締役）

柳沢秀行（倉敷民藝館館長補佐、公益財団法人大原芸術財団シニア・アドバイザー）

今回は「民藝（民衆的工芸）」について紐解きながら、日常の中で見出せる美や、民藝の現時点について考え、感じる時間を設けました。講師は民藝運動の周縁を追いかけ、掘り起こし、それらにまつわる企画も行うデザイナーの軸原ヨウスケ氏、多彩ないかご（い草の籠）を製作する須浪隆貴氏、倉敷民藝館館長補佐の柳沢秀行氏。当日は倉敷民藝館のギャラリーツアーとトークのほか、い草を使った鍋敷きワークショップを体験しました。

須浪隆貴…1993年岡山県倉敷市生まれ。子どもの頃からもの作りが好きで、いかご（い草の籠）を編む祖母を手伝う。産地の編いと自らの編いを取り混ぜた多彩ないかごを、1886（明治19）年創業の須浪亭商店5代目として製作。

軸原ヨウスケ…1978年生まれ。デザインユニット COCHAEのメンバーとして「遊び」をテーマにした様々な創作活動に携わる。折り紙パズルや紙ずもうなどの商品で受賞歴多数。著書に『アウト・オブ・民藝』（共著、誠光社、2019年）など。

柳沢秀行…1991年より岡山県立美術館学芸員。6本の自主企画展や教育普及事業、ボランティア運営に関わる。2002年より大原美術館に勤務。現代作家との事業や展示活動を担当し、社会連携事業を統括。2023年より倉敷民藝館兼務。



レポート

今回は民藝のテーマにふさわしい豪華な講師陣を迎えて、倉敷美観地区を舞台に観て・聞いて・作って楽しむ多彩なプログラムを企画。会場の「倉敷民藝館」には、民藝品や美術に関心のある方など約20名の参加者が集まりました。

まずは柳沢さんが、民藝のルーツや倉敷における民藝運動の発展、倉敷民藝館の役割や倉敷の民藝品・羽島焼についてレクチャー。定義を語ることが難しく、多様な解釈がされやすい民藝を分かりやすく解説しました。約30分のギャラリーツアーでは、柳沢さんが進行役となって展示品を鑑賞しました。

鑑賞後は須浪さんのトークに移り、家業である須浪亭商店の歴史や花ござ、いかごの文化や製作についてのお話を聞きました。また民藝の蒐集家として、民藝との出会いや現代的な民藝とその関係性、伝統の継承についても言及。「自分の仕事は民藝ではない」と捉えつつも、「民藝的な考え方や地域・風土を重んじる姿勢でものづくりをしている」と須浪さん。若い作り手ならではの視点と飾らないトークに、参加者も熱心に耳を傾けました。

一旦休憩に入り、一同は近くの文化施設「きび美ミュージアム」に移動してランチタイムに。「きび美ホール」にて地元惣菜店「みねふじん」のお弁当を食べました。午後からは軸原さんの案内で、「日本郷土玩具館」の展示品を鑑賞しました。続いては、軸原さんが普段のデザインワークや創作活動をはじめ、民藝運動の周縁にある人、物、事柄にスポットをあてたりサーチ活動「アウト・オブ・民藝」を紹介。郷土玩具や農民美術といった庶民の伝統的なプロダクトについて、その魅力や歴史、民藝運動との関係性などを紐解きました。

後半には講師3名のクロストークを実施。互いに質問を交わし合い、話すテーマもよりアカデミックで専門的な方向に。ここでは民藝運動の歴史やその本質、柳宗悦の時代と現代で変化する民藝の価値観、作り手としての在り方、民藝の展望といった話題で盛り上がりました。最後は須浪さん指導によるワークショップが開かれ、全員でい草の鍋敷きづくりにチャレンジ。編む時の力加減が難しいものの、い草の良い香りに包まれながら夢中で手を動かす楽しさを体験しました。



3名の講師によるクロストークの様子



郷土玩具について解説する軸原さん



鍋敷きづくりのワークショップ

キーワード



倉敷民藝館

江戸時代の米倉を改装して昭和 23 年に開館した、国内で2番目の民藝館。時代を超えて受け継がれた陶磁器、ガラス、木工品、漆器、紙工品など、日常生活の中で使われる上質な品々が1万 5000 点ほど所蔵されている。その多くは初代館長・外村吉之介が蒐集。館内の約 3 分の 1 が常設展示となっている。今回は「いろいろの部屋」を借りてトーク&ワークショップを行い、柳沢さん進行によるギャラリートツアーも開催した。

<https://kurashiki-mingeikan.com/>



日本郷土玩具館

昭和 42 年に開館した郷土玩具の博物館。江戸時代から現代までの日本全国に伝わる郷土色豊かな玩具やおもちゃ約 5000 点が展示されている。張り子の人形や独楽、凧、など、伝統的で懐かしい玩具や工芸品が並んでいる。敷地内にはショップ、カフェ、ギャラリーを併設。今回は昼食後に同館へ移動し、軸原さんのアテンドで展示品を見学した。同館の開館には外村吉之助も関わる。

<https://gangukan.shopinfo.jp/>



倉敷いかご

岡山県倉敷市で作られている、い草を編んだかごのこと。かつて倉敷南部では綿と同様にい草の生産が盛んに行われていた歴史がある。講師の一人、須浪隆貴さんは代々花ござやいかごを製作していた「須浪亨商店」5 代目職人。現在は、須浪さんがご家族やスタッフと共にいかごの伝統を受け継いでいる。今回は鍋敷きづくりのワークショップを実施。

<https://maruhyaku-design.com/>

ワークショップ

ランチ

昼食は倉敷市の惣菜店「みねふじん」のお弁当。唐揚げ、ハンバーグ、コロッケなど人気のメイン 3 種、野菜のサラダや和え物といった味わい豊かなおかずが盛りだくさん。一同は「きび美ミュージアム」内で食事と会話を楽しんだ。



プログラム

11:00～ 倉敷民藝館に集合

・オープニングトーク

・柳沢さんよりレクチャー(倉敷民藝館について)



11:15～ 民藝館ツアー(案内役…柳沢・須浪)



11:40～ 須浪さんトーク

・倉敷いかご・須浪亨商店について、岡山の民藝について



12:15～ ランチタイム&休憩

・きび美ミュージアムに移動して昼食

13:00～ 日本郷土玩具館を見学(案内役…軸原)



13:30～ 軸原さんトーク

・「アウト・オブ・民藝」などの活動について

14:15～ 講師3名によるクロストーク

15:00～ 鍋敷きづくりワークショップ(須浪亨商店チーム)

終了・開催

参加者コメント

・民藝という言葉を中心に、歴史と人物が広がっていくのが興味深かった。(40代/男性)

・登壇者の方々がとても豪華。話も面白く飽きのこない5時間だった。(30代/女性/主婦)

・民藝に関する人や物だけではなく、民藝の精神性に関する話も聞きたかった。(女性)

・民藝の“今”を知りたかったので、須浪さんや軸原さんのお話がとても良かった。(50代/女性/教育関係)

講師コメント

今日は多彩な企画で皆さんとお話ができて、忙しいながらも楽しむことができました。喋りたいことがたくさんありましたが、後半にやっと口が慣れてきた感じです。民藝への熱量は、今のものづくりや倉敷の文化にもつながる大切なものだなと改めて感じました。(須浪)

私の好きな分野に詳しい柳沢さん、作り手の須浪さんとは初対面で、いろいろ質問できる良い機会でした。民藝の聖地的な地元の倉敷で、こういった企画に参加できたのは感慨深いです。お二人とはまだ話し足りないです。民藝はひと言で言い表せないもの。前提としてよく分からないものだとして理解する、そこから興味を広げるのが大事だと思います。(軸原)

今回はお二人に来ていただいたので、私としても日頃とは違った視点で喋りたいことが喋れました。普段は文化政策系の企画に呼ばれることが多く、民藝関連の企画は初めてだったので純粋に楽しかったですね。盛りだくさんの内容でしたが、このぐらいの時間配分だと各テーマの焦点がぶれることなく理解できて、結果的に良かったです。(柳沢)

子どもの問いが導く世界：フラーと共に考える未来のヒント

日時：2024年12月14日（土）11:00～16:00

開催地：奉還町ユースセンター（岡山市北区奉還町3-1-32）

講師：芹沢高志（アートディレクター、翻訳家）

20世紀を代表する思想家バックミンスター・フラーは、子どもとの対話を通じて得たユニークな発想を紐解き、子どもたちに「疑問を持つこと」の大切さを伝えています。今回はフラーの著書の翻訳者である芹沢高志氏をお招きし、フラーの生き方や思想について子どもたちを始めとする参加者にレクチャーしてもらいました。その後ジタバッグ（フラーが発明した多面体のおもちゃ）のワークショップを通して、気づきや発見を共有しました。

芹沢高志…神戸大学理学部数学科、横浜国立大学工学部建築学科を卒業後、（株）リジонаル・プランニング・チームで生態学的土地利用計画の研究に従事。1989年にP3 art and environment を開設。「横浜トリエンナーレ2005」キュレーター、別府現代芸術フェスティバル『混浴温泉世界』総合ディレクター（2009年、2012年、2015年）、「さいたまトリエンナーレ2016」ディレクターなどを歴任。「さいたま国際芸術祭2023」プロデューサー。訳書にバックミンスター・フラー『宇宙船地球号操縦マニュアル』（ちくま学芸文庫）、エリック・ヤンツ『自己組織化する宇宙』（工作舎、内田美恵との共訳）、ピーター・マシーセン『雪豹』（ハヤカワ文庫NF）など。



レポート

この日は20世紀を代表する思想家のバックミンスター・フラーがテーマ。子どもたちと一緒に講義やワークショップを体験しながら、子どもたちがいろいろな気づきや発見をしていく様子を見て学びを得る、という二重構造の実験室となっています。案内役は、多くのアートプロジェクトでキュレーターやディレクターを務める芹沢高志さん。会場の「奉還町ユースセンター」には、小・中学生から若者世代、教育や芸術分野に関わる方など幅広い世代の参加者が集まりました。

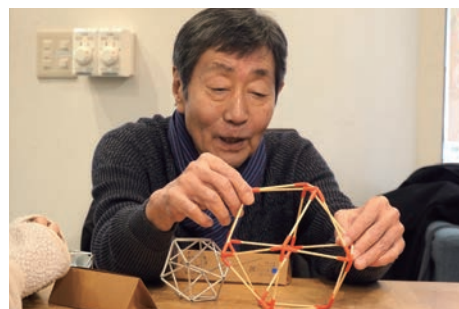
まずは芹沢さんから、フラーの功績や人物像についてお話していただきました。幼少期から弱視だったというフラーは、独特な視点で物事を捉えていました。幼稚園の授業では、すでに三角形を基本とした立体構造物を作っていたという驚きのエピソードも。建築や数学、物理学など多分野で類まれなる才能を発揮し、自身の導き出した理論の応用技術で、みんなが幸せに生きるための発明に尽力しました。

芹沢さんはフラーが発明したドームの建造物や三輪自動車を紹介し、活動の基軸となった「最小限の資源で最大の効果を得る」という考え方について解説。著書「宇宙船地球号」の題名にも触れながら、地球をひとつの宇宙船に捉えた思想と、今の地球資源や環境問題との関わりについて話しました。芹沢さんは「フラーの考え方や生き方を通して、若い方にも自分が納得できる世界観を見つけてほしい」とまとめました。

後半は昼食を挟み、ジタバッグを使って遊ぶワークショップを行いました。まずは材料を組み立てて、曲げながら幾何学的な形の変化を楽しみます。今回使ったジタバッグは、竹ひごをシリコン製のジョイントでつないだ丈夫な造りで、折り畳む時の心地よい感触がクセになります。子どもたちは積極的に手を動かし、2個を組み合わせた帽子にしてみたりと自由に発想を広げました。参加者は芹沢さんを交えて、フラーの人物像や発明品についてトークを展開しました。最後は大きな多面体作り挑戦。時間内の完成は叶わなかったものの、会話が弾む楽しい時間となりました。



前半は芹沢さんがフラーの思想や生き方を紹介



ジタバッグの説明をする芹沢さん



手と頭を使って形をつくるのが楽しい

キーワード



奉選町ユースセンター（地域交流ステーションVerdeベルデ）

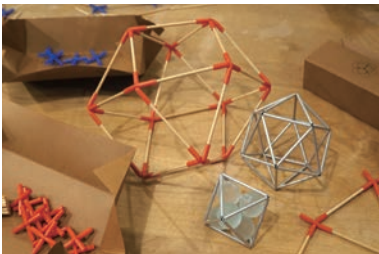
ユース世代（中高生世代）が自らの意志で居場所を選び、自発的に活動できる場として2022年12月に開設された民設民営の施設。岡山駅西口から徒歩8分の奉選町商店街にあり、毎月のべ100名のユースに利用されている。建物は「地域交流ステーションVerde」という名称で、自習・イベント・展示など幅広い目的で活用できるコワーキング&レンタルスペース、カフェを運営。地域の人々が自由に集える交流の場として親しまれている。

<https://ivory428668.studio.site/>



リチャード・バックミンスター・フラー（R.Buckminster Fuller）

アメリカの建築家、エンジニア、哲学者、発明家（1895年-1983年）。20世紀を代表する思想家、技術的先見者として知られ、建築、数学、芸術、科学、教育などの分野横断的な視点で才能を発揮し、さまざまな業績を残している。ジオデシック構造による「フラー・ドーム」を考案。地球をひとつの宇宙船として捉えた全地球主義的思考宣言の著書「宇宙船地球号操縦マニュアル」を1968年にアメリカで出版。芹沢さんが同著の日本語訳（ちくま学芸文庫）を行っている。



ジタバッグ

バックミンスター・フラーが発明した多面体のおもちゃ。正三角形八面を頂点でジョイントさせた立方八面体の形状で、フレキシブルに動かして折り畳んだり展開したりと、さまざまな形に変形できる。構造としては「ベクトル平衡体」とも呼ばれている。ワークショップでは、岡山市在住の造形作家・向井宏志さんが竹ひごとシリコン製のジョイントで作ったジタバッグを使用。一人1個ずつ配り、希望者には販売も行った。

ワークショップ

ランチ

奉選町ユースセンター1階の「カフェベルデ」に用意してもらったメニューを全員でシェア。チーズやトマト、バジルなど約7種類ものピザやおにぎり、唐揚げ、ポテトフライ、みそ汁など豪華な品ぞろえで、まるでパーティーのように楽しいランチタイムに。

プログラム

11:00～ 奉選町ユースセンター 集合

・オープニングトーク

11:15～ 芹沢さんによる解説

・バックミンスター・フラーについて

・翻訳書「宇宙船地球号操縦マニュアル」について など

12:30～ 昼食

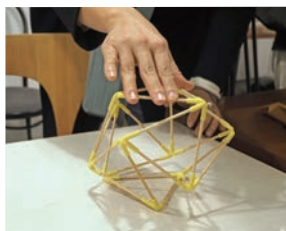
13:40～ ワークショップ

・ジタバッグを使って、いろいろな形を作ってみよう

・芹沢さんへ質問タイム

15:30～ 大きな多面体のジタバッグを作ってみよう

終了・解散



参加者コメント

- ・自分で図形を作るのが楽しかった。（10代/女性/小学生）
- ・フラーの常に発見を求める動きが技術の発展につながっていて、フラーの考え方もつくっていくところが、研究者としてすごいと思った。（10代/男性/中学生）
- ・講師のお話がとても分かりやすく、スリリングで面白いです。ワークショップも楽しめました。（50代/男性/大学教員）
- ・これまで知らなかった話がたくさん聞けました。実験室は都度新しい発見があり、文化の可能性を感じます。今回のワークショップで使ったジタバッグのキットは、とても完成度が高いと思いました。（40代/女性/団体職員）

講師コメント

子どもが加わると物事が予期せぬ方向に進み、大人が考える事とは違う発想に行き着いて面白いですよね。そこに学びがあるかどうかは一旦置いて、今日の楽しさが子どもたちの記憶にずっと残って、10年、20年先にも思い出してもらえればうれしいです。

今日はフラーの理論や実績よりも、一人の人間としての生き様をしっかり伝えたいと考えていました。「世の中のみんなのために」という信念に共感してもらい、それぞれの学びにってもらえれば幸いです。（芹沢）

アートマネジメント研修 「人口減少時代の地域文化芸術振興に 向けて～信州アーツカウンシルの3年間」

日時：2025年2月26日(水) 15:30～17:00
開催地：岡山県天神山文化プラザ&YouTube配信
講師：野村政之(信州アーツカウンシル ゼネラルコーディネーター)

人口減少に伴う地域の過疎化や高齢化、担い手や後継者不足の課題は、文化芸術分野においても影響を与えています。そこで今回は、地域社会の変化に対する心構えや地域社会の持続的発展に文化芸術をどう生かすか、地域文化を構想するヒントについて学び合う機会とします。

講師の野村さんには、地域に向き合いながら試行してきた信州アーツカウンシルの3年間の実践や過疎、コミュニティの希薄化など様々な社会課題を抱える地域でできることをお話いただき、未来と可能性について一緒に考えました。

野村政之…1978年長野県生まれ。舞台芸術の企画制作やドラマトウルクとして創作現場に、コーディネーター等として公的芸術文化支援に並行して携わる。長野県内の公共ホール、東京の小劇場での活動、アーツカウンシル東京アーツアカデミー調査員、沖縄アーツカウンシルプログラムオフィサー、長野県県民文化部文化政策課文化振興コーディネーターなどを経て2022年4月より現職。(一社)全国小劇場ネットワーク代表理事、NPO 法人舞台芸術制作者オープンネットワーク(ON-PAM) 理事。



レポート

参加者からの注目度が高かった「人口減少時代」というトピックについて、「地域の文化振興における課題として、自分もいまだに考え続けています」と話す野村さん。舞台芸術の現場を経験後、東京と沖縄でアーツカウンシル(文化芸術活動の中間支援)に関わるようになり、出身地である長野県では非常勤の県庁職員という立ち位置からも文化芸術振興を経験してきました。まずは自己紹介を兼ねて、20年近い文化芸術活動のキャリアを振り返りながら、講義の本题へと入っていきます。

●人口減少時代に向けて、考え方や見方を変えることが必要

野村さんは、時代により変化する文化芸術振興の在り方について、20世紀は「標準・普及」、21世紀は「創造」という言葉で表現。地域に芸術祭やアーツカウンシルができたことも一つの流れになり、コロナ禍を経て新たな段階に入っていると述べました。人口減や税収減は、将来的に行政サービスや地域コミュニティ、文化施設や文化財などの維持・存続にも大きく影響します。「これからは考え方をリセットし、物の見方を変えることが必要。集客や賑わいといった「増加」を必ずしも目指さない豊かさや、人が減る前提での評価指標をどこに置くかを考えたい」と話しました。

次に、野村さんが関わっている信州アーツカウンシルの設立経緯や活動について紹介しました。現在は長野県内 77市町村のうち、30以上と半数近い地域で活動を展開。助成支援、協働共創、発掘交流の3つを軸に、文化と広い領域をつなげる取り組みや、作家や担い手の発掘をする事業を行っています。多分野と連携しやすい文化芸術の利点を生かし、信州アーツカウンシルでは多様な主体と広く支え合うことで、地域の文化をつくる「文化的コモンズ」の形を目指しています。

●文化芸術の担い手を増やす仕組みづくり

2024年度は36の事業を支援。助成支援の具体的な事例として、空き物件のリノベーションやアートで街づくりをする「〇と編集社」や、各家庭に眠る8ミリフィルムを集めて地域映画をつくる「まつもとフィルムコモンズ」を取り上げました。特徴は、資金的な支援だけではなく寄り添い型の支援を行っていること。現場に赴いて活動をヒアリングし、一緒に経験や課題を共有しながら、担い手のレベルアップやネットワークの拡充を目指しています。



講師の野村さん



信州アーツカウンシルのWEBサイト



「(一社)〇と編集社」の「トビチ美術館」プロジェクト

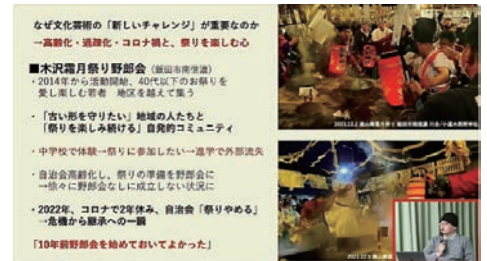
野村さんは、3年間の助成が終わった団体を「文化共創パートナー」に制定し、地域の文化活動の担い手を増やす仕組みづくりを進めています。小さな人のつながりがアクティブになり、文化の創造や密なコミュニケーション、支え合える環境が整っていく。それが可能になれば、人が減ってもアートが身近にある豊かな暮らしが持続できるのでは、と話しました。

終盤では公立文化施設の課題についても触れました。これからの支援として「地域にサポートされる公共ホール」を提案し、長野県の茅野市民館の運営をサポートする市民のNPO法人サポートCが行う子どもたちにアートを届けるプロジェクトや、福島県いわき市の文化施設「いわきアリオス」の子育て拠点づくりなど、市民の力を運営に反映したモデルを紹介しました。さらに新たな挑戦として祭・芸能の継承にも力を入れ、「木沢霜月祭り野郎会」の活動も取り上げました。野村さんは「祭などの地域コミュニティも、担い手のやる気が前に出てくるのが課題解決の近道」と話しました。

これからの文化振興について、野村さんは「共創」というキーワードを導き出しました。必要なのは、地域の魅力を共有し楽しむこと。多様な連携で新たなコミュニティや持続可能な地域文化を循環させること。野村さん自身も明確な答えはまだなく、「持続的な文化事業とは何か？という問いを、みんな考えて」と締めくくりました。



「まつもとフィルム commons」の地域映画「まつもと日和」



「木沢霜月祭り野郎会」の活動

Q&A と コメント

Q 1. 劇場で活動をしていて、人や予算の都合で良い活動も続かずに終わってしまうことがありました。公共施設が地域に果たす役割と、施設を支えようとする方々の話を聞いて、自分たちも似たようなことをしていると分かり、すごく救われる思いです。

A. 単に劇場内で体験をシェアするだけではなく、「劇場全体の取り組みを支えていこう」「地域をつなぐ役割をやろう」と市民の方が思った時に、劇場側も一緒に取り組んでくれると、地域の関係も自然にならなるといいます。人がいないという課題も、劇場の中の人たちは日々感じているはず。それをみんなの問題にできると良いですね。

Q 2. 取り組みの意義や成果について、上長や県庁に伝える際の工夫や、意識していることがあれば教えてください。

A. 私たちの取り組み自体、県庁の建物の中では全然知る機会がないんです。そこで今年は、県庁の中でもイベントを行いました。相手の目が届く場所に自分たちの活動を持っていき、知ってもらえる機会をつくるようにしています。

Q 3. 以前、「岡山のアソシエイツのやっていることは細かい」とおっしゃられました。褒め言葉と受け止めましたが、どんな意味があるんですか？

A. 細かいというのは、毛細血管のように細部まで血の通った活動をしているというイメージですね。信州アーツカウンシルも岡山と似ていて、寄り添い型支援をより細かくしていくために「文化共創パートナー」制度を設けました。今までの助成団体に接点になってもらう狙いです。地域の中で多くの直接的な接点をつくることは、アーツカウンシルだからこそできること。そこに地域文化の在り方があると感じました。それに対する国の評価基準の目盛りがアンバランスで、もっと理解を深めてもらえるようになれば、アーツカウンシルの有効性が広く知られると思います。

講師コメント

講義では伝えきれなかったのですが、儲からなくても楽しんで活動が続けることが重要だと考えています。「立派な結果」よりも「答えのないプロセス」を大事にできるように、私たちアーツカウンシルが伴走型支援をしていくことで、よりお互いがレベルアップしていく仕組みが理想的ですね。今回のような研修は、アーツカウンシル同士での担い手紹介や情報交換を行う上でも、良い機会になるのではないのでしょうか。今日出会った岡山の文化芸術に関わる方々も境遇は同じ。ちょっと話し合えば、同じマインドでやれることも見つけられそう。そんな距離の近さを感じました。



研修のアーカイブはこちらからご覧になれます。

YouTube配信
OKAYAMA CULTURE V - おかやまカルチャー・ヴィー -
<https://www.youtube.com/watch?v=NLMaauJEC5E>

キーワード



信州アーツカウンシル

信州・長野県内における文化芸術活動の支援組織として 2022 年に始動。地域主体・県民主体で行われる多様な文化芸術活動の担い手に対し、さまざまな機関と連携しながら助成事業や相談、助言などの寄り添い型支援を行っている。長野県ゆかりの現代美術作家に焦点を当てた企画展「シンビズム」、アーティスト・イン・レジデンスの取り組み「NAGANO ORGANIC AIR」などの地域創造・交流プログラムを主催。信州大学人文学部とのプロジェクト「信州アーツ・クライメート・キャンプ」といった連携・協働事業なども実施している。

<https://shinshu-artsCouncil.jp/>

備中国の色につながる風土～色に宿る地域の価値観と文化の再発見～

私たちが暮らす地域を「色」という視点で観察してみると、特定の色と結びついて浮かび上がるイメージがあることに気がきます。

たとえば、「岡山県の色は？」と問われたら、何色を思い浮かべますか？

何か色が浮かんだ時、そこにはヒト・コト・場所のイメージも一緒に繋がってくるのではないのでしょうか。そして、そのイメージから呼び起こされる色も人によって異なり、同じヒト・コト・場所だとしても単一の色では表しきれないかもしれません。理屈ではなく私たちが無意識に感覚的に捉えている地域の色＝姿が気になりました。

例えば、岡山県の西北端部にある新見市の石灰採石山の白い世界は、そこにいっただけで別世界にいるような感覚を覚えます。石灰は工業原料としてだけでなく彫刻家や美術家に提供されることにより、広く学生や一般の人々が身近にふれあい、体験することのできる美術材料としても使用され、そこには産業と文化・芸術の生きたつながりの姿が見られます。また、新見市にお住まいの皆さんにとって、ピオーネの色は紫ではなく黒なのだそうです。これは色味が黒いほど甘くて美味しいという意味合いだと知って腑に落ちるとともに、新見市は黒の物と白の物（黒は千屋牛、たたら製鉄、木炭やピオーネ、白は雪、石灰など）の生業の土地であるという話も相まって、地域に根付いた色の認識が強く印象づけられることとなりました。

さらに、矢掛町にある白みかげ石や青石は、全く違う色の石が同じ地域で採石されていること自体がとても珍しく、特別な場所に思えました。その地域の、有史以来変わらない土や石の色と、時代とともに変わり続ける人々の営みについて思いを馳せると地球環境にまで意識が広がります。

日本は四季の移り変わりがはっきりしているので、多様な色に対する感受性が高く、色につける和名からも文化の美意識が繊細に感じられます。赤い色ひとつとっても茜（あかね）、紅絹（もみ）、蘇芳（すおう）、韓紅（からくれなゐ）、臙脂（えんじ）、猩々緋（しょうじょうひ）など、漢字から色の材料や場所、その名が付けられた時代背景も含め、意味を想像できることなど大変興味深く感じます。きっと、誰もが日本の四季、春夏秋冬のそれぞれの色を思い浮かべられると思います。特に、岡山は全国でも晴れの日が多いことから、太陽が映し出す豊かな色彩がある環境は、文化芸術を育むエネルギーになっているのではないのでしょうか。

今回、たくさんの方に協力していただき、その地域に暮らす人々の思う色について調査しました。備中エリアの色の分布を手がかりにヒト・コト・場所に触れるきっかけとなれば幸いです。

金 孝妍（おかやま文化芸術アソシエイツ プログラム・コーディネーター）



広報物「備中国の色につながる風土」

ワークショップ

アフリカのカラフルな布とIDEA R LABの マテリアルを使って自作巾着を作ろう!

日時:2024年9月15日(日) 13:00~14:00、15:00~16:00

開催地:IDEA R LAB(倉敷市玉島中央町3-4-5)

講師:田賀朋子

jam tun のカラフルでポップな柄のアフリカ布の端切れと、IDEA R LAB のマテリアルライブラリーで整然と仕分けされた色とりどりの廃材という、“捨てられたり廃棄されたりする布やモノ”を活用して新たな価値を生み出すワークショップを行いました。素材として提供された山盛りの端切れや廃材を前に、子どもも大人も、県外や海外からのゲストも皆創造力を掻き立てられた様子です。生成りのシンプルなトートバッグや巾着をベースに、アフリカ布ならではの大胆な柄の端切れを思い思いの形に切り取ったり、おおよそ廃材と呼ぶには似つかわしくない可愛いボタンやファスナーなどを貼り付けたり、チュールレースのような異素材と組み合わせたり。真剣な表情で集中して作業を続け、あっという間の1時間でした。参加者それぞれに、オリジナルなデザインの作品が完成しました。

jam tun (ジャムタン) とは…セネガルで使われているブラール語で「平和しかない」「平和だけ」という意味。青年海外協力隊員としてセネガルの小さな村で2年間を過ごした矢掛町出身の田賀朋子さんが、帰国後に現地の小さな村の仕立屋さんと一緒にものづくりをするために立ち上げたフェアトレード※のアパレルブランド。※フェアトレード…途上国の生産者と先進国の消費者が公正な取引を行うことで、貧困や児童労働などの問題を解決することを目指した取り組み

田賀朋子 … 1989 年生まれ、岡山県矢掛町出身。大学卒業後、マンチェスター大学大学院修士課程で「貧困と開発」を学ぶ。2014 年 9 月に青年海外協力隊員としてセネガルに赴任。ゴミ問題の啓発活動の一環として、服に使う布の端切れをリユースしてバッグやポーチを製作・販売する活動の支援に取り組む。16 年 9 月に帰国した後、岡山県内の観光案内所で働かたわら、jam tun を開業。WEB <https://jamtun.com>



カラフル

アフリカ布と色とりどりの廃材

「jam tun」と「IDEA R LAB」。いずれも備中地域を拠点にしており、度々コラボレーション企画も行う両者の共通点は、扱う素材がカラフルで目を奪われること、そしてアップサイクル、リユースの視点で取り組みを続けていることである。

jam tun で使用されるのは、カラフルな色柄が特徴的な「アフリカンプリント」と呼ばれる生地。色柄の種類は無限大で同じ柄の生地を探そうと思っても、二度と出会えないこともしばしば。

隅々まできれいな色や柄がある生地は小さくなくても魅力的なので、jam tun では端材をなるべく出さない裁断パターンを意識し、小さな生地も素材として活躍させるなど、ゴミと捉えられていたものに付加価値を付け加えるアップサイクルなものづくりに取り組んでいる。

セネガルではじまったものづくりは、岡山との繋がりも大切にしており、遠い国から届いたカラフルな生地と、岡山の素材や作り手と掛け合わせた作品（岡山の特産品であるデニムや帆布生地と組み合わせた小物やバッグ。地元企業とコラボした足袋型シューズ。岡山市のA型事業所と協働で制作するオーダーメイドの日傘づくり）が生まれている。

IDEA R LAB は、ミュージアム・エデュケーション・プランナーの大月ヒロ子氏が 2013 年に倉敷市玉島にオープンしたクリエイティブリユースの拠点。築 300 年の古民家を改修した居心地のよい空間でワークショップ等のイベント、クリエイター・イン・レジデンス等を行う。地域住民や工場・店舗から集めた布や木材、機械の部品等の多種多様な廃材を資源として活用するための「マテリアルライブラリー」を備え、ここでは廃材がその形や色などの特性を元に分解・整理され一覧性高く保管およびディスプレイされている。ドネーション制の物々交換スペース「アゲモラ」、共用農園「ラボファーム」など、地域の方々と協働するプロジェクトも。モノの循環だけでなく、人やコトが緩やかにつながるコミュニティが生まれている。



ワークショップ

石とカカオのおいしい関係：白みかげ石で カカオ豆からチョコレートを作ってみよう！

日時：2024年9月28日（土）10:30～12:00、13:30～15:00

開催地：やかげ町家交流館（小田郡矢掛町矢掛2639）

講師：松村晃泰

「やかげ町家交流館」で、白桜みかげの臼とすり棒を使い、カカオ豆からチョコレートを作るワークショップを開催しました。彫刻家・松村晃泰さんが制作した臼とすり棒を用い、矢掛町の石材やカカオについての解説も行われました。参加者は焙炒後のカカオ豆の皮をむき、温めた臼の上でカカオニブをすり潰しました。香ばしい香りが広がる中、カカオの色と質感が変化する様子を楽しみました。最後に砂糖をお好みの量を加えて練り、型に入れて冷やし、チョコレートが完成。昔ながらの石の道具が生み出す味わいの奥深さと香りや色などを直に感じられる貴重な体験となりました。



松村晃泰 … 彫刻家。1974年京都市生まれ。現在岡山市在住。チョコを通して石の文化を矢掛町から世界に発信したい思いで、白みかげ石で囲まれたチョコレート専門店「石挽カカオ issai」の代表社員も務めている。1999年大阪芸術大学大学院 芸術制作研究科（彫刻）修了。2018年 World Snow Festival 第2位（グリンデルワルト / スイス）、2019年 国際雪像彫刻チャンピオンシップ 2019（ブリッケンリッジ / アメリカ合衆国）、2020年 石～3人のかたち～（岡アートギャラリー / 岡山）、2021年 天プラ・セレクション vol.95 松村 晃泰 展「視線の行方」（天神山文化プラザ / 岡山）、2022年 ザ・のみぎりズム 2022 [企画・参加]（矢掛町 / 岡山）など国内外で活動。



白と青

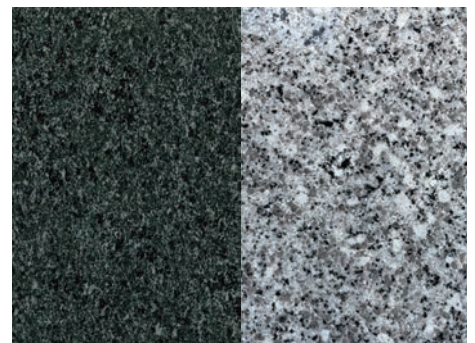
白と青が織りなす石の風景

矢掛町の白桜みかげと備中青みかげ

矢掛町は、江戸末期頃より採掘が始まった約 6600 万年前の白亜紀末に生まれた「白桜みかげ」（花崗岩）と、丁場が開かれて歴史が浅く、埋蔵量も豊かな緑がかった青色の「備中青みかげ」（閃緑岩）という、異なる色と種類の石材が採石される地域。一般的に、日本の石材産地は特定の石種や色調に特化していることが多く、矢掛町のように、同一地域内で異なる種類や色調の石材が採石されるケースは少ない。

「白桜みかげ」は、白色の際立つ花崗岩であり、緻密な組成と美しい輝きを持つ。長石や石英が主体であり、建築材や彫刻にも適している。岡山県内では墓石や記念碑、神社仏閣の建材として重用されてきた。一方、「備中青みかげ」は、青みがかった深い色合いを持つ閃緑岩である。鉄やマグネシウムを多く含むことで生まれるこの色合いは、落ち着いた重厚感を演出し、耐久性にも優れている。そのため、城郭や石垣の材料として使用されてきた歴史をもつ。また、水を含むことでさらに色が深まり、湿度の高い環境下では異なる表情を見せる。

「白桜みかげ」と「備中青みかげ」は、時代の流れとともに建材からアクセサリや生活に密接なもの活用にまで広がりつつあり、地域の地質や歴史、文化を映し出す貴重な素材である。これらの石の色が持つ美しさは、日本のものづくりの精神と結びつきながら、今もなお現役で地域の文化や伝統を豊かにする要素の一つになっている。



ワークショップ

日本画の絵具を使って秋を描こう

日時:2024年10月26日(土)10:30~12:00

開催地:倉敷芸術科学大学(倉敷市連島町西之浦2640)

講師:澁澤星、原田よもぎ、潮嘉子

日本画の絵具を使って秋の色の葉っぱや花を描くワークショップを倉敷芸術科学大学で開催。倉敷芸術科学大学の澁澤星准教授、原田よもぎ助教、潮嘉子技術補助員の指導のもと、広々としたデッサン室で行いました。参加者は木製の丸いうちわに葉っぱや花などの絵柄を写し描いて、墨で骨描きをしました。その後、普段使う絵具とは異なる岩絵具や胡粉(ごふん)を用いて彩色しました。日本画の絵具の使い方や「垂らしこみ」という技法も学びました。岩絵具は塗った時と乾燥後の色が変わるので、粉の状態の絵具の色を参考に鮮やかな色を楽しみました。また、鉱物の粒子の大きさによる発色や質感の違いを実感し、日本画独特の色彩の魅力に触れることができました。

澁澤星…1983年東京都生まれ。2016年東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程美術専攻日本画研究領域修了。博士号(美術)取得。2013年第68回春の院展初入選、翌14年再興第99回院展初入選。同年第7回秀桜基金留学賞に採択されトルコとフランスに渡航。2024年~倉敷芸術科学大学 芸術学部芸術学科准教授。これまで東京・小林画廊を中心に個展・グループ展、国内外のアートフェアへの参加多数。原田よもぎ…1995年生まれ。2018年倉敷芸術科学大学 芸術学部デザイン芸術学科日本画研究室卒業。2020年同大学院 芸術研究科美術専攻日本画研究室 修士修了。2023年同大学院 芸術研究科芸術制作表現専攻 修了 博士号(芸術)取得。2024年~倉敷芸術科学大学 芸術学部芸術学科 助教。「字のない物語を描く」をテーマに制作活動を行う。主に日本画画材を使用した作品を制作しており、近年は新しい屏風表現をメインに研究している。その他、美術館などでの日本画ワークショップ活動などを行う。潮嘉子…1998年鳥取県生まれ。2020年倉敷芸術科学大学芸術学部デザイン芸術学科卒業。

2022年同大学院美術研究科美術専攻修士課程修了。2020年倉敷芸術科学大学卒業修了制作展にて加計勉大賞、買い上げ賞、岡山大学薬学部賞を受賞。2022年同展にて加計美術館賞、芸術研究科賞を受賞。



日本の色

風土が生む色

日本画の絵具とその多様性

日本画の絵具は、岩絵具をはじめ、虫・植物・鉱物など多様な自然由来の素材から生み出されてきた。岩絵具は天然鉱物を粉碎し、膠で定着させることで絵具として発色する。「胡粉」は白色顔料として重宝され、牡蠣や蛤の貝殻を粉碎して作られた。粒子の細かさによって光沢や透明度が変化し、岩絵具の発色を引き立てる効果がある。黄色顔料である「藤黄(とうおう)」は、かつて東南アジア原産の植物ガンボージの樹脂から作られた顔料で、独特の鮮やかさが特徴である。赤系の中には、サボテンに棲息するカイガラムシから得られる動物性顔料で「コチニール」という透明感ある深い赤色もある。

岩絵具の色名は、自然界の色や日本の伝統文化に根ざしたものが多い。「柳葉裏(やなぎはうら)」は葉の裏の繊細な緑、「碧灰末(へきかいまつ)」は青みを帯びた落ち着いた灰色、「藤袴(ふじばかま)」は秋の七草の一つであるフジバカマという植物の名前に由来。「藍(あい)」は、植物の藍草から抽出される青色で、染色にも広く使われてきた。日本画の色は、単なる絵画材料ではなく、風土や文化、歴史の中で育まれてきたものづくりの結晶である。産地ごとの鉱物や植物の違いが色に個性を与え、時代とともに技術が進化しながらも、古来の色名や伝統的な技法が受け継がれている。この多様な色彩の継承こそが、日本画の奥深い魅力の一端をなしている。



ワークショップ

児島の青色:デニム再生フェルトを使って コースターを作ってみよう!

日時:2024年10月27日(日)10:00~16:00

開催地:つなぐ倉敷(倉敷市阿知2-20-9)

講師:正宗幸子

児島のデニム再生フェルトでクリスマスツリーやコースターを作り、好きな形や飾り付けをするワークショップを倉敷市美観地区内にある LOGIN Kurashikiにて開催。デニム色の「再生フェルト」を直に触れながら繊維製品の再生の1つの方法を知る機会となりました。さらに、ファッションコンサルタントであり with FASHION co. 代表の正宗幸子さんの指導を元にパーソナルカラー診断を実施。衣類の3Rの「リデュース:自分に似合うファッションを知って、無駄なお買い物をしない」という購買行動の意識を高めました。会場には「再生フェルト」について図入りの説明や資源循環に関する内容を展示し、児島の青色デニムの魅力と、持続可能なものづくりについて考える時間となりました。



正宗幸子… with FASHION co. 代表。ファッションコンサルタント。ファッション業界 45 年目。倉敷芸術科学大学 非常勤講師、一般社団法人カラーコーディネーター協会 パートナー・認定講師、岡山県地球温暖化防止活動推進員、JDC(ジャパンデニムコレクション) 2024 実行委員等。資格:パーソナルカラー・ライフケアカラー、顔タイプアドバイザー、骨格スタイルアドバイザー1級等。

青色

児島のデニム再生フェルト

繊維産業が盛んな地域には、加工の際に生じる裁断くずや廃棄繊維専門の回収業者が存在する。回収された繊維は分別、裁断、粉碎、間織などの工程を経て綿状に戻され、再び繊維として利用される。これらの工程を反毛(はんもう)という。

倉敷市児島地域は、日本有数のデニム産地として知られ、その深い青色は風土と職人技が生んだ象徴的な色である。この青も、反毛によって新たな形に生まれ変わる。それが「再生フェルト」。デニム製造時に生じる廃棄繊維を活用し、倉敷市玉島の工場で生み出されている。

繊維 100%で接着剤不使用という環境を配慮した製法で作られた「再生フェルト」は、吸音性・断熱性に優れ、通気性が良く、湿気に強く、反りにくい特性をもつ。現在の主な用途は、水島地域で作られる自動車のダッシュボードや燃料系のエアフィルターなど限られるが、デニム由来の青みが独特の風合いを生む「倉敷の再生フェルト」は、その特性からファッション系をはじめ、今後、多方面での活用が期待される。

ファッションコンサルタントの正宗幸子氏は「倉敷の再生フェルト」にいち早く着目し、児島のデニム産業が生み出す資源循環の可能性と再生フェルトの活用をサポートしている。再生フェルトの活用により、衣類の3R(リデュース・リユース・リサイクル)を推進。不要な衣類を減らし、長く愛用する意識を高めるとともに、まだ使える衣類は寄付や譲渡で再活用し、着られなくなった衣類は素材として再生している。

近年、「スローファッション※」や「多様性」といった価値観が広がり、持続可能なものづくりへの関心が高まっている。児島の青色デニムが生み出す資源循環の取り組みは、地域の風土と結びつきながら、新たな可能性を切り拓いている。

※スローファッション…人権や環境・動物に配慮して作られたファッションアイテム。消費者がほんとうに必要なものだけを厳選し長く愛用する取り組み。



ワークショップ

真っ赤な高梁市吹屋とうがらしと ベンガラで染め物体験

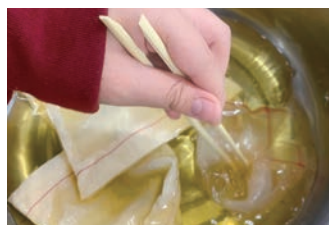
日時:2024年11月10日(日)13:00~、15:00~

開催地:たいこまるプラザ(高梁市成羽町吹屋851-1)

講師:李侖京

高梁市「たいこまるプラザ」で、小学生から大人まで幅広い世代が集まり赤とうがらしとベンガラを使った染色ワークショップを開催しました。講師は、自然染めや舞台美術の分野で活躍する李侖京さん。参加者は、色の変化を体感しながら、それぞれの「赤」を自分の手で染め上げました。参加者は、煮出した赤とうがらしの染液に巾着袋を浸し、植物染料ならではの優しい発色や香りを体感しました。一方、ベンガラ染めでは、筆やスタンプで自由に模様を描き、乾燥・洗浄を経て深みのある赤色を定着させました。変化しやすい植物の赤と、色褪せにくい鉱物の赤。それぞれの特徴を学びながら、吹屋で生まれた伝統の色と、今なお人々の暮らしを彩る色のつながりを感じる機会となりました。

李侖京…1978年韓国ソウル生まれ。母国の大学で衣装デザインを専攻した後、ファッションアクセサリデザイナーとして勤める。2009年来日してから植物染料による染色を学び、繊維素材を用いた造形作品を制作。舞台美術、オブジェ、インスタレーション作品などを発表。2015年倉敷芸術科学大学大学院 芸術研究科芸術制作表現専攻(博士課程修了)。2018年第11回岡山県新進美術家育成「I氏賞」大賞受賞、2020年個展「小舟によせる唄」高梁市成羽美術展、2021年『Autumn Concert』舞台美術(広島)、2022年『第6回ニシガワ図鑑』舞台美術(岡山)、2023年第24回倉敷新鋭作家選抜美術展他グループ展多数。



赤色

吹屋の赤 鉱物と植物が織りなす色の風景

高梁市吹屋地区は、江戸時代から続くベンガラ(酸化鉄顔料)の産地として知られ、独特の深い赤色が町並みや工芸品に息づいている。吹屋の赤は、鉱物由来の色として歴史的な価値をもち、建築や染色に幅広く用いられてきた。一方、近年では佐藤紅商店が高梁市で赤とうがらしを栽培し、紅い柚子胡椒を製造するなど、新たな赤色のものづくりが生まれている。

ベンガラ染めは酸化鉄(Fe_2O_3)の微細な粒子を布に定着させることで発色する。ベンガラは光や水に強く、防虫・防腐効果があるため、古くから建築資材や染料として用いられてきた。その色合いは、落ち着いた赤褐色であり、時間とともに深みを増す特徴がある。対して、赤とうがらしの赤は、カプサンチンやカプソルビンなどのカロテノイド色素(動植物が持つ、自然界に存在する黄色や赤色の色素の総称)による。これらは油溶性のため、水だけでは繊維に色が定着しにくく、染色にはエタノールや酢を使って色素を抽出し、ミョウバンや鉄媒染で発色を調整する必要がある。その結果、植物由来ならではの鮮やかで温かみのある赤が生まれる。赤とうがらしを水で煮出して染色すると、極めて淡い橙色に染まる。ベンガラのように受け継がれる赤と、赤とうがらしの加工や工夫によって多彩な表情を見せる赤。伝統的な色と現代の色のつながり、そして地域の風土が生み出す色の多様性が地域文化の豊さを物語っている。



ワークショップ

あなたの知らない石灰の世界 採石場見学とズグラフフィート体験 話題の「sekkaiこいしクッキー」付き

日時:2024年11月13日(水) 11:00~16:00

開催地:足立石灰工業株式会社(新見市足立3893)

講師:ラドスワフ・プレディギェル

普段は見ることのできない石灰石鉱山の世界をのぞける体験ツアーを新見市で開催。参加者は足立石灰工業に集まり、まずは広大な採掘現場を見学しました。展望台から見渡す石灰岩の階段の光景は、まるで特撮映画のロケ地のように。行き交う重機も小さく見えるほどダイナミックな白の世界を堪能しました。後半は採掘された石灰石を使って伝統壁画技法のズグラフフィートに挑戦。瀬戸内市在住のフレスコ画アーティスト、ラデックさんの指導を元に、石灰モルタルの下地を二層に分けて削りながら、好みの絵柄を描きます。乾く前の下地が崩れないようにと、参加者も真剣な表情に。ワークショップの最後には、石灰入りクッキーで、食を通じた石灰体験も味わいました。



ラドスワフ・プレディギェル (愛称:ラデックさん) … ポーランド生まれ。瀬戸内市在住。専門はフレスコ画。1998年ワルシャワ国立芸術大学卒業、3年間同大学アシスタントとして勤務。2004年日本に移住。備前福岡、白石島、吹屋、児島、美咲町などのアートイベントに参加。ポーランドの小学校、パリ、美咲町、牛窓ホテルリマーニでフレスコ画を制作。ポーランド、フランス、ドイツ、日本でグループ展。「ズグラフフィート in 瀬戸内市オープン美術館」の取り組みを継続している。「ズグラフフィート」による壁画の制作で使用する消石灰は、岡山県新見市のもので、高梁川水系の地域資源を活用しながら新しい風景を生み出していく。

白色

石灰石鉱山に広がる白の世界

石灰石(せっかいせき)は、炭酸カルシウムを主成分とする天然鉱石のことで、セメントの原料をはじめ鉄鋼、化学、建設土木、肥料、食品といったあらゆる産業に活用される素材として採掘されている。日本は石灰石の豊富な国であり、全国各地の石灰岩地帯には、石灰岩が雨水や地下水によって浸食されて生じた鍾乳洞が見られる。石灰石鉱山も全国に分布しており、重要な資源として私たちの生活に欠かせない役割を果たしている。

一般的に石灰石は白いイメージを持たれており、炭酸カルシウムの純度が高い石灰石を焼成した生石灰、水を反応させた消石灰は白色をしている。不純物を含む石灰石は黒っぽく、灰色や茶色をしていることもある。多くの鉱山では重機や発破で地面を削って石灰石を掘る「露天掘り」が行われ、広大な敷地に白い石灰棚が広がる圧巻の光景をつくりだしている。

中国山地に囲まれた新見市は、市域の大半が標高400m以上の石灰岩質という地質的特性があり、日本有数のカルスト台地として高純度の石灰石を産出。市内には採掘現場や生産工場が点在している。新見に本社を置く「足立石灰工業株式会社」は、1944(昭和19)年の創業から80年以上の歴史を持つ石灰の総合メーカーとして加工、製造、販売までを自社で行う。同社は露天掘りを採用し、新見市内に約13ヘクタールの採掘場を所有。見渡す限りに白い大地が広がる景色は特撮映画の世界観を彷彿とさせ、巨大な工場群と共にダイナミックな生産現場となっている。



公式YouTube OKAYAMA CULTURE V

岡山県文化連盟では、YouTube公式チャンネル「OKAYAMA CULTURE V -おかやまカルチャー・ヴィ-」をオープンしました。「楽しいが見える!」をコンセプトに、当連盟で作成する様々な動画コンテンツや、実演家の皆さんが自ずから撮影した動画を配信する場として広く公開し、県内の様々な文化芸術活動の様子を伝えていきます。

開始時期 | 2020年

2024年度作成・公開数 | 2本



URL <https://o-bunren.jp/tv/>

訪問実験室



文化芸術が生まれてくる現場⑧ 「The 民藝～伝統を受け継ぐ草のいかごづくり～」

今回は、明治時代創業でい草製品の製造販売を行う「早沖〇百花菴 須浪亨商店」(※〇百は囲み文字に百) 5代目の須浪隆貴さんの工房に伺って、いかごの製作の様子や道具、作品などを見せていただき、伝統的な技法を守りつつも、現代の需要に合わせてモダンな要素を取り入れ、少しずつ変化し続ける民藝の魅力について、お話を伺います。

Profile | 須浪隆貴(須浪亨商店5代目、岡山県民藝協会副会長)

1993年岡山県倉敷市生まれ。子どもの頃から、もの作りが好きで、いかご(いぐさの籠)を織る祖母を手伝うのも自然な日常。産地の織いと、自らの織いを取り混ぜた多彩なイカゴを、1886(明治19)年創業の須浪亨商店5代目として製作。須浪さん製作の縄のれんはキノシタショウテン(木下尚之さん)の一部店舗にも使われている。

アートマネジメントオンライン研修



人口減少時代の地域文化芸術振興に向けて～信州アーツカウンシルの3年間

人口減少に伴う地域の過疎化や高齢化、担い手や後継者不足の課題は、文化芸術分野においても影響を与えています。そこで今回は、地域社会の変化に対する心構えや地域社会の持続的発展に文化芸術をどう生かすか、地域文化を構想するヒントについて学び合う機会とします。講師の野村さんには、地域に向き合いながら試行してきた信州アーツカウンシルの3年間の実践や過疎、コミュニティの希薄化など様々な社会課題を抱える地域でできることをお話いただき、未来と可能性について一緒に考えました。

Profile | 野村政之

1978年長野県生まれ。舞台芸術の企画制作やドラマトウルクとして創作現場に、コーディネーター等として公的芸術文化支援に並行して携わる。長野県内の公共ホール、東京の小劇場での活動、アーツカウンシル東京アーツアカデミー調査員、沖縄アーツカウンシルプログラムオフィサー、長野県県民文化政策課文化振興コーディネーターなどを経て2022年4月より現職。(一社)全国小劇場ネットワーク代表理事、NPO法人舞台芸術制作者オープンネットワーク(ON-PAM)理事。

マイニングおかやま

岡山県を拠点に活動するアーティストを地域の貴重な文化資源として可視化し、アーティスト活動の活性化に繋げていただくためのプラットフォーム。類まれな輝きを放つ宝石やこれから輝く原石を採掘するような感覚で岡山県の文化芸術に関する人・コト・場所を紹介し化学反応を起こしていくサイトを公開。「文化芸術マイニングリレー」「クリエイション再遊記」「文化・芸術・芸事名鑑」の3つのコンテンツを運営しています。

開始時期 | 2022年2月

内容 | ・文化芸術マイニングリレー:好きからはじまるリレー形式のインタビュー記事

登録数 | 8

・クリエイション再遊記:岡山県天神山プラザ企画展「天ブラ・セレクション」等の活動記録や作家情報

登録数 | 103

・文化・芸術・芸事名鑑:岡山県で活動する表現者の登録型データベース

登録数 | 322

・マイニングおかやま 活用実践モデル事業:「マイニングおかやま」の活用促進を目的として、おかやま文化芸術活動相談窓口に寄せられた相談の中から、公益性が高く文化芸術の社会的価値を具現化するに相応しい事業をモデル事業として採択し助成。事業実施後はモデル事例としてWEB公開しています。

採択件数 | 2

-部活動の地域移行を見据えて、公立中学校の吹奏楽部で指導者のいない楽器パートについて、主に初心者を対象に指導をしてくれるアーティストをマッチングし、事業を支援

-支援学校の児童・生徒の特性に応じた文化芸術活動についての相談及び提案依頼を受けて、児童・生徒の障害の程度に合った体験活動を提案できるアーティストをマッチングし、事業を支援



URL | <https://www.mining.bunren.jp/>

おかやま文化芸術活動相談窓口

文化芸術活動を行っている個人、団体を対象とした専門の相談窓口を設置。文化芸術活動への取り組み内容や思いなどをしっかり聴き、寄り添いながら、段階に応じたサポートや情報提供などを行いました。

相談・サポート内容 |

- ・練習場所の提供、紹介
- ・指導者やアーティストの紹介、マッチング
- ・事業相談や計画策定
- ・集客計画やチラシ配布で広報サポート
- ・県内外から集めた各種情報の提供
- ・活動に関するお悩み相談
- ・補助金・助成金の活用 etc.

受付件数 | 49件

NPO活動 資金調達基礎講座 助成金説明会&相談会

日時 | 2024年9月20日(金) 13:30~15:30

会場 | 津山市役所東庁舎

受付件数 | 4件



監修	金 孝妍
編集	高田佳奈、橋本 誠、溝口仁美
デザイン・制作	安藤次郎 [LOVE AND PEACE]、合同会社生活と表現
発行	公益社団法人岡山県文化連盟 〒700-0814 岡山市北区天神町8-54 岡山県天神山文化プラザ内
TEL	086-234-2626
FAX	086-234-8300
URL	https://o-bunren.jp/